

# 虚の符

洪水企画 2014.12.10

10

イカタ

http://www.kozui.net

(Cioran あなたの絶望は素敵だ！)

小島きみ子

すべては一つの空、一つの識への接近の方法を探るための山荘行きだった。黄色の昆虫になること。それは盲目の夏の日に始まった計画だった。ルビー色の日の光が私の中から上に、湖の氣息をつれてやってくる。薔薇の葉陰では、(人類は存在しなかった)などと、神の御言葉を伝えにきた三頭目の黄蝶の声がする。あの細い昆虫の脚が、パレリーナのように、花びらの上に止まる。去年の夏のあなたの指の上に、止まるところにそっと止まる。夕べからのふたつの息がひとつの息に生まれ変わろうとする。聞き取れないような。繊細な指が、息と息が、ふたりの愛について語りあう。灰色の鳥蔭。黄蝶の乱舞。黒薔薇の葉と棘。襲と棘。あなたの指によつてなぞられた羊皮紙の頁を捲る。草花の蜜は冷たい唇に吸われて、毎朝毎朝あなたに摘まれた。高原の白樺の樹液は、唇の臙脂色のダリアの凶熱に飲みほされ、冷えた夜の白ユリの寝間で儚い夢は見つされた。その夜のメタルの目明かりの瞬間に、私と月と星と森のシダの魂たちが暗鬱な響き、白いシーツの上に樹液草液体の文様を焼き付け、夜が明けて霧がやってくる。黄色の昆虫になるために。

宵闇の森の黄ツリフネソウ。この道を歩いて行けば誰に出会えるのか。たとえばヨハン・ルートヴィヒ・バッハは、一七二二年五月一日に死んだというその年の羊皮紙に書かれている公文書。次元を超えて私の元へやってくる(もの)。やがて、集落への坂道は水色になり、零れる言葉と映像の水分が指輪を外した薬指に溢れる。現実を強化するのだ。(生きていて、そのようにやってくる)。ことを終え、黄色の昆虫になっていくのだ。あなたと私はこの時空でミルフィーユの精密さで絡み合い、熱狂の宵闇病を患う。ベルセウスは、大神ゼウスとアルゴスの王の娘ダエとの間に生まれた。ベルセウス座が、「白銀の葡萄の房」と言ったのはあなたでした。ほら。秋のスーパーマンが上がってきましたよ。あらゆるグロテスクと不条理の熱狂のうえに、黄色の昆虫がもうじきやってくる。

ガラスの熱帯

森山 恵

傾いだ ことり屋  
ガラスの引き戸の向こう  
鳥籠が積み重なり 天井から吊り下がりが  
色とりどりのインコが  
閉じ込められた籠の内につかる  
震わす羽根の 奇妙な明るさ  
聞こえない悲鳴 悲しき熱帯  
首のレモンイエローは金色に近く  
一滴ずつ赤味を加えながら深いオレンジ色そして赤色へ  
尾羽は濃いキミドリ  
異様なほど長く  
緑は一枚ごと 色あいの異なるむらさき  
熱帯の色

老婆が ガラス戸の前に座り  
ハタキを握って  
道ゆく人を睨みつける  
一羽のインコ  
止まり木で羽根を引き抜いている  
黄色 オレンジ色  
キミドリの羽根  
お腹の辺りはもう すっかり赤むけになって  
抜きとられた羽根が 色濃いまま床に降りつもる  
極彩色が膨張し 室内を満たしていく  
月が光る  
店の奥  
なにかが動く  
インコのように目を光らせ どこまでも声を押し殺して  
扉の外に出られない  
羽根を啄ばみ傷がさらけ出されるまで  
極彩色  
自らを ひたすら むしりとり  
ネヴァアモア ネヴァアモア



(Cioran あなたの絶望は素敵だ！) 山荘のベルを鳴らしたものに災いあれ！晩秋の黄昏どきは人を絶望させると、ベチユアの蜜を吸うあなた。月の欠片が白く東の丘に上がり、嘆きの川「アケロン川」について語りあっていました。カロンが死者の魂を冥界ハーデースへと渡す、地下世界の川ステュクスの支流は、この山荘から見下ろせる清流チューマガワの語源にも及び有意義な時間でした。夏はヨーロッパでは「豊穣の夏」ゆえに夏を惜しむ。And after many a summer dies the swan、そしてあなたの夏のものも白鳥は息絶えるという詩句は、ハクスベリーにあります。(あなたの夏ののち)内蔵の層は完成される。ヒポクラテスは、人体の内部には「血液」「粘液」「黄胆汁」「黒胆汁」が流れており、そのバランスによつて健康が保たれていると説いたのでした。黄色の昆虫になるという、計画が完成するのです。

神話伝説には、数万年を遡るであろうものもあり、もしくはその語り伝えのなかで、ホモサピエンスの神経生理的構造が反映されていくものもあるのです。それらを分別するのは、いまだ調査者の直観であるとは！調査者の直観とは、白く言い難い、重習ですよ！重習とは？(衆生の日常の身口による言動が記憶する媒体「アラヤ識」に作用し、それが更に深化するアラヤ識からの「直観」です。アラヤ識での説明と表裏一体なのがカルロの「直観」ズアルクの微候的認知だと思のですが、彼はその典型として医学的症候を挙げます。医学ほど「勘」を喪つていく世界はないとも思われるのです。

山荘では冬に備えてたくさん薪を購入しました。桜の木の下でお別れしてから、この日がくるのを待つていました。キッズクラブは当時のままにあります。芝生は、もう枯れてしまいましたが、それでもあなたが知っている草花の前では、とても饒舌になるでしょう。知についてきた水鳥。木の中で押しつぶされて眠るシマリスの沈黙。エルストのあの作品、森(月光の中のモミの木)の光景が過ぎります。神話の森で再会しましょう。黄色い昆虫の羽が生えるところですよ。デリダは風景を歯牙もかけなかった。とうとうやつてきました。(僕らの直観)黄色の昆虫が！(Cioran あなたの絶望は素敵だ！)山荘のベルを鳴らしたものに災いあれ！晩秋の黄昏どきは人を絶望させると、ベチユアの蜜を吸うあなた。

赤飯

神泉 薫

気まぐれな神の手拍子を合図に  
大地へと駆け落ちた私たち  
てんでに枝を広げる苦菜の山坂を上りきったら  
喜ばしい記念日  
私たちは  
まあるくむすんだ赤飯をほおぼる  
あかあかと赤飯は人間のくらがりを灯し  
内部一面に  
満開の花を咲かせる  
外から中へ  
此岸から彼岸へ  
咀嚼と共にわりきつた赤い米の見る夢はあのころ  
みどりの風ふきわたる水田に  
小さくも尊い影を沈めて  
一本一本の苗を育ててきた祖先たちの背が  
陽の光を浴びてまろやかにうねっていたあのころ  
若いバツガが跳ねる  
その跳躍の放物線は  
伸びあがる生の躰きへ向けて夏の季節を拓いていた  
崩落の子光も見せずに  
あおぞらというヒクニックシートは  
開いたまま二度と最めない  
屈んだ背を伸ばして見上げる者がいる限り  
素手でぎゅっと握る  
純白の米 ひとつぶひとつぶを  
赤で染め上げる  
今このときを  
喜びで染め上げる  
生まれたての赤ん坊の匂いが身を包む  
節目の著を置き  
瞳を閉じてもう一度囁みしめれば  
時の風が手放した変わら帽子が  
ただひとつの天へと  
なつかしく  
ゆうゆうと  
昇つてゆく

エノコログサのころ

久野雅幸

このころ―  
道を歩いていると  
エノコログサを手にするひとと  
すれ違ふ  
下校途中の男の子がふたり  
エノコログサを手にしている  
それぞれが  
片手の中でアロベラのように回したり  
相手の手をくすぐったりして  
犬を連れた婦人がひとり  
エノコログサを手にしている  
片手に二本のエノコログサを持ち  
歩くにつれて  
揺れるがままに  
揺れるがままに  
揺れさせて

道猫のあちこちで  
エノコログサが穂を垂れている  
この時節―  
エノコログサを手にするひとと  
すれ違ふ  
あれは  
だがどういう理由で置いていったのか―  
わからないけれども  
わからないけれど  
辻に立つ  
赤い帽子のお地蔵様の前に  
一本のエノコログサが置かれている

夜伽と紙縫り

海埜今日子

くれないの、おとき。かゆをすする、しようねん、く  
いいるそぶりが、さしだされ、という、えとぎぞうしだ、  
くりひろげられ、あわや、という、そのてまえて、のみ  
こみ、もう、ちっとも、きおくすることなんか。まるで、  
こより、つまり、そんな、なかよしさん、つづること、  
だんだん、かれらを、そばにいたの、いなかったの。  
ふきんしんですが、なつかしい。よるをといで、かみを  
すく、どこかで、かゆいような、けたいがあり、そのあ  
いだけ、かれらは、ここに、あらわになり、とけるの  
でしょうか。いわく、せいに、なぞって、こういで。  
くれないの、ほとり。かみを、つくる、しようじよ、だつ  
たかもしれない。すんでのところ、かれらに、であう  
ことなく、こやで、まつ。すいた、てで、なかよしさん  
まなこを、こすれば、やきつくことが、ありますか。き  
こえない、もじの、はぐくみます。ひつかりが、かれ  
を、たばね、かつての、できごとを、おもいしる。

すき。ふたりが、ずつと、とおい、じゅんあいを、こた  
えない。から、いいえ、きづかなかった、おぼえたかつ  
たよ。そうにゆうされた、えびそーど、にじませて、ね  
じりました。だれか、くすぐる、かきかた、ばんざい。  
くれないの、らせん。あらたかな、はんじものなら、しよ  
うねんだって、なまなましい。かゆを、はぐくみ、れん  
めん、いたのですが。どうして、それが、ふさいだつ  
たの？こたえ、のみこんで、なんども、かれら、はき  
だす。まるで、よとき、かくまえから、ねがいました、  
わすれました。かれらを、ここでも、いまも、

きらい。はがゆいようで、かみを、きつた。かこを、とい、  
こねくりまわし、だんだん、べつ、なんという、いき  
もの、えとぎぞうしだ、おさらいするよ、いつも、べつ  
じんの、みしつたかおでの、とうじようでした。  
くれないの？よとき。そばに、かゆ、すくように、にて、  
ひ、なる、けれども、やさしい、だれかでしたか。せい、  
おもって、かみしめて、ねじれた、だんめんが、まるで、  
ふゆからはるへ、ああ、てわたしたのも、なかよしさん  
だったから、つや、かさね、かれらを、いたんで、こや  
の、そこで、かみを、ひらく、おでかけです。

(予め雨天を採取する、余白から天引きする……)

たなかあきみつ

予め雨天を採取する、余白から天引きする  
とりとめもないニュースの永久運動の泡に絡まってむせかえる  
はじまりはいつも緊急であつて泡を吹き  
飛ばす前にもいつも車帯の口輪(なぜか狼芝居の)をかませられて  
悄然たる園谷の晩餐(SOS)から放出される口短調ミサの  
哀傷からしきりに角ばる青紫色の(川岸に流れつく(溺死者の)  
ニーチェの口唇よ、レインコートの縦線が戦々デゼリテの口角でも  
髭に隠れた新聞活字の、ぎざぎざの空模様に、生首をピン生一本  
と口走る前に逆流する灼熱の唾のように  
あまたの裂け目からなる(裂溝の)檻  
利発すぎる子ども特有の無造作の殺気をもよほ頻発させる  
口語の吃音もどきのヘアピンカーヴに差しかかる空きビンの

晩夏のラジオが裏返しに口ずさむパッパ、パルル……  
いくたびか火山弾のように鳥の木のさえずりは増幅する  
夜半のルビー狂いよ冷えればそれだけBはぎらぎら血を吐く  
ティンパニによるCOSMOSノスタルジアの打倒か血みどろの覚音か  
わらわら発火する妻籠の火桶とは対岸の  
《束間の情動》だが青空のじつはウルトラマリン  
新鮮魚のびちやちや跳ねあがるゴム手袋の五指は  
大童で見えない致死率の版図を血の釘のうごめきを  
大西洋の海辺まで簡易テント内の油照りまで拡げつつある  
貝殻の凶鑑で綿の極意をそのかずかずの波紋を確認しろ  
刃先のように研ぎ澄まされた草いけのアラベスクまで  
アンドレイタウロフならば透かし(亀のように背泳で泳ぐだろう)  
脳葉のティンパニをびらびら叩くなら  
《ロイアの結び》満載の改訂版カタログをすばやく参照のこと  
アラベスクの懸垂あがけてダストは滞留せずダンシング、画布の  
オリウグリーンによる耳の尖鋭な試技にまずは乗り出す前に  
サハラ砂漠から急遽掘り出されたスビノサウルスの棘皮を  
ひたすらEtrousas dieの色鉛筆で果敢にも塗りつづけた  
とはいえ先ほどの画布で腐りかけのナスは皺から  
暗視的に沈めば沈むほどますます浸潤する暗紫色の鼠サ  
ポストイット代わりに本のページに乗り上げるカミソリの火焔  
本物のカミソリの刃をページ外の三方から三枚ずつ差し込んだ  
そんな眼球が一挙にクリップされそうな写真を見たことがある  
画面上のハガネ色という究極の灰色をめざして、パルセローナの  
珠玉の水滴よ雨天順延されず(磁場は星々の生成上どんな役割を  
果たしたのかわれわれは知らないし、星々の新世代が生誕する源の  
星間ダストや星間ガスのいずれの特性もわれわれは知らない  
とされている)(ホアン・ブロッサ)(COSMOS))

étude 四肆舞 018

池田 康

塩の雨が降る  
第五の季節  
大地の亀裂に  
黒い頭痛が伝播する  
トマトに塩の雨  
卵に塩の雨  
古い約束に塩の雨  
明日の夢に塩の雨  
第五の季節は五百年  
渴いた人々が泉に集まるが  
泉は言葉を忘れてしまひ  
湧き出さない  
塩の雨降る塩を  
黒いパラソルの群れがゆく  
太古の陽が塩を輝かせ  
パラソルのかげの目はつぶれ

